

|   |   |
|---|---|
| 調 | 査 |
| 報 | 告 |

# 離島の第一次産業を考える①

沖縄県座間味村

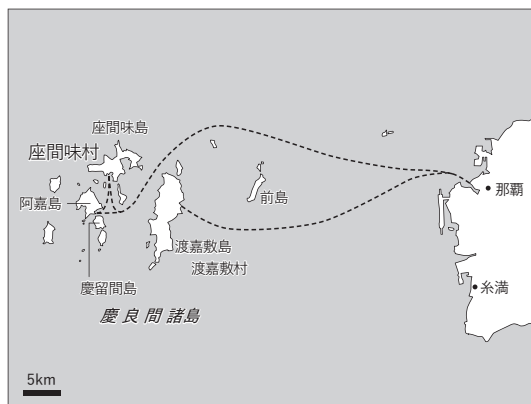
## 第三次産業が

## 九割以上を占める村

座間味村は、那覇から西へ約四〇キロメートルに位置する慶良間諸島の西側の島々からなる自治体である。座間味島・阿嘉島・慶留間島の三つの有人島があり、令和七年五月末日時点の村の人口は、五五六世帯・八六二人となっている。「ケラマブルー」と称される世界屈指の透明度を誇る海、サンゴ礁や熱帯魚に彩られた美しい海中景観で知られるほか、冬には繁殖のため回遊するザトウクジラを観察できるホエールウォッチングの島としても有名で、国内外から年間一〇万人を超える観光客が訪れている。

来島者にインバウンド客が多いこと

が村の観光の特徴で、二〇二五年四月の入域者数・九三九三人の内訳をみると、外国人が三四〇一人と全体の三六パーセントを占めている。国別でみると、中国からが六八四人と最も多く、次いでドイツ（二九七人）、フランス（二九四人）、アメリカ（二七七人）、イギリス（二〇三人）の順となっており、いわゆる欧米系の来島者が多い傾向にある。（二社）座間味村観光協会の宮里祐司会長によると、古座間味ビーチ（座間味島）が、「ミシユラン・グリーンガイド・ジャポン」の二つ星を獲得した二〇〇九年ごろから増え始め、一四年に隣の渡嘉敷村とともに慶良間諸島国立公園に指定されて、さらに伸びた感じだという。SNSなどで座間味を知り、来島する外国人が多く、釣りやし



ユノーケリング、ダイビングなどのマリンスポーツを楽しむ傾向にある。観光協会では、多言語対応の案内板の

本財団事務局



慶良間諸島国立公園ビジターセンター「青のゆるる館」。館内には座間味村の案内とともにカフェも併設されている。

設置や、二次元コードで島内の観光スポットを紹介するなど、インバウンドに向けた取り組みを実施している。村の就業人口の構成をみると、観光をはじめとする第三次産業従事者の割合

合がもつとも高く、約九二パーセントを占める。観光業などの就業者の家庭では、休日など学校休業日が繁忙期と重なることで、親子がそろって過ごす時間が少なくなってしまう現状を鑑み、村では、令和六年四月一日から、児童・生徒の学校授業日における休暇取得を推奨し、家族の時間の確保や遠方への旅行を通して、学校内では経験できない体験により子どもたちの心身の成長につなげていく「座間味村児童・生徒休暇制度『ざまやすみ』」に取り組むなど、独自の施策を展開している。

## 座間味から世界へ

二〇二四年九月、マリンスポーツが盛んな座間味村からSUP世界一が誕生した。国際サーフィン連盟主催のデシマークでのSUP世界大会「テクニカルレース（約一キロメートルのコースを三周する）一八歳以下の部」で、座間味

島出身の宮平琥太郎こたろうさんが、日本代表として初挑戦し、みごとに優勝を飾った。また、座間味を拠点に練習をしている奥秋李果おくあきりさんも、チームリレーに出場し、優勝している。

現在高校生の琥太郎さんは、通信制の八洲学園大学国際高校で学びながら、座間味島で練習に励んでいる。「小学生のころに、友だちたちと一緒にSUPを始めた。島は海に囲まれていて、さ



SUPの世界大会で優勝した宮平琥太郎さん。



座間味村漁業協同組合の中村秀克代表理事組合長。

さまざまなコンディションを体験することが出来る。毎年、『ケラマブルーカップ』というSUP大会も開催されており、SUPをする環境に恵まれている」ハワイやヨーロッパが強いSUP競技にあつて、積極的に海外の大会にも挑戦していきたいと話す琥太郎さん。将来的には「座間味から世界へ！」として、自分が活躍することで座間味を盛り上げたいと、チャレンジを続けている。

## 兼業が多い座間味の漁師

第三次産業が主な座間味村において、第一次産業従事者は、就業者全体の二パーセントほどに留まり、その大半が水産業を営んでいる。座間味村漁業協同組合の中村秀克代表理事組合長によると、組合員数は五十人強だが、ほとんどが観光業などとの兼業漁師だという。二〇二三年四月時点の漁船数は、七九隻（座間味島六〇隻、阿嘉島・慶留間島一〇隻）で、漁獲量は五〇トンほど。マグロやカジキ、カツオの一本釣りやソデイカの旗流し漁のほか、もずくの養殖などが行なわれている。

漁協に水揚げされた魚は、フェリーで那覇市の泊港まで運ばれる。「現在、村が単独で海上輸送費の補助を実施しているが、燃油をはじめさまざまな物価が高騰している昨今、漁師の実入りは厳しい状況にある。島内の飲食店や宿泊業者は、漁協から魚を仕入れてく



座間味村漁協の直売所の店内。

れているところが多いが、以前と比較すると減少傾向にある。水揚げも少なくなってきたおり、なんとか組合員の収入が増えるようにしていきたい」と、中村組合長は語る。漁協では、二〇一三年四月より、地元の新鮮な魚を取り扱う直売店を運営し、鮮魚に加え海鮮丼や唐揚げ、コロッケなどをテイクアウトで提供しているが、近々、直売所

の隣にお土産品などを取り扱うスペースもオープンさせる予定である。

座間味村の漁業の大きな課題は、新規漁業者の確保である。関心がある若者もいるが、村内に住居が少なく、雇うことができない。漁協の職員も、現在、正職員六人、パート一人の計七人体制だが、手が足りているとは言いがたいという。有人国境離島地域にも指定されている座間味島では、二隻体制で漁業監視も行なっている。「久米島の西側まで監視に行くこともある。領海やEEZの保全の観点からも、持続可能な漁業経営に向けた支援が必要だ」と、中村組合長は話す。

## もづく養殖を復活させ、島の特産品に

今では座間味を代表する特産品の一つとして人気の高いもづく商品。村には、二軒のもづく養殖事業者が、「安護

の浦」と呼ばれる湾のなかで、もづくの生産や加工品づくりに取り組んでいる。そのうちの一家「和山海雲」の代表を務める和山通年<sup>みちとし</sup>さんは、大阪府出身。三〇年ほど前にダイビングインストラクターとして座間味に移住した。当初は、ダイビングショップで働き、いづれフリーとして独立を考えていたが、島内の事情もあり、なかなか上手くは進まなかったという。そんな時に、「かつて島で行なわれていたもづく養殖を

復活させないか？」という誘いを受け、仲間の神谷豊光さんとともに、養殖業へ挑戦することにした。

それまで漁業の経験はなかった和山さんは、見よう見まねで覚えたり、県の水産海洋技術センターなどで養殖技術を学び、その後、一九九九年にももづく養殖を復活させた。「もづくの価格は良かったものの、経費が非常にかかった。また、生産管理が未熟で、もづくの歩留まりもあまり良くなかった。その時から、コストを考えながら歩留まりをしっかりとつけるような管理を意識している」と、和山さんは当時を振り返る。ちなみに、神谷さんは、島内に二軒あるもづく養殖事業者のもう一軒「ざまみもづく」の代表として、もづくの生産や飲食店「寅次郎」などを営んでいる。

和山さんによると、座間味のもづく養殖は、一月〜二月にかけての「種付け」から始まるという。網にももづく



和山海雲代表の和山通年さん。



和山海雲が手掛けているもずくの加工商品。

が付着したのを確認したら「沖だし（海に網を入れる）」し、網からの発芽を待つ。三〇五センチメートルほどに成長したら、また網を別の海に移動させ、そこでさらにもずくの成長を待ち、収穫

する。和山海雲では、収穫したもずくをその日のうちに塩漬けし、保存している。出荷の最盛期は、春先の三月から六月ごろである。

現在では、もずくそのものを出荷するほか、もずく麺やもずくふりかけ、スープなど加工品の製造も手掛けている。また、港の近くに、飲食店「もずくそば 和山海雲」を構え、もずく料理を提供している。

もずく養殖の今後について、和山さんは「温暖化の影響で海水温が上がり、もずくの成長に影響が出ているように感じる。水質調査を行ったり、高温に耐えられる品種の『G株』を導入するなど、改善を図っていきたい。近年は、もずくの価格が横ばいで次の世代が育ちにくい環境になっている。なんとか価格を上げるように努力するとともに、後継者の育成に力を入れたい。現在、和山では若いUターン者が増え、養殖を手伝っている」と、語る。

## 阿嘉島で始まる 小規模農業の挑戦

村役場が立地する座間味島と定期船でわずか一〇分ほどの距離にある阿嘉島。こちらも国内外から多くの来島者が訪れる観光の島である。阿嘉島と慶留間島は、阿嘉大橋で架橋されており、さらに慶留間橋で慶良間空港のある外<sup>ふか</sup>地島まで結ばれている。慶良間空港は、慶良間諸島唯一の空港で、二〇〇六年の定期航空路廃止以降はチャーター便やプライベートのヘリコプターなどが発着する。空港から阿嘉島へ陸路で移動し、座間味島や渡嘉敷島へ渡る富裕層も少なくない。

第三次産業が主流の阿嘉島で、農業の六次産業化を目指しているのが西田吉之介さんである。西田さんは、ニシバマ（北浜）ビーチ近くの土地でシークワーサーなどの生産に取り組み、村議



会議員として農業委員も務めている。

島出身の父を持つ西田さんが、阿嘉島に1ターンのしたのは一〇年ほど前、二七歳のときである。移住後は、飲食店を経営してきた。「祖父が島の医師で、住民によく知られていたため、孫の私も島人から良くしてもらえた」と、当時を振り返る。

そんな西田さんがシークワサーの生産を始めたきっかけは、島産のお土産を増やしたいと考えたからだという。一般的に、農家が商品を作っても販路を開拓することが難しい。しかし、現在の阿嘉島は売る相手はいるのに、売るものがない状態。観光客に手にとってもらえるお土産をつくりたい」

西田さんによると、島内の就業者はダイビングや宿泊施設などのサービス業が中心となっており、農業のみで生計を立てている人はいないという。「まとまった収穫を確保するためには、大規模な農地が必要となるが、島の土地

は一筆（一区画）が小さく、地主が多いため交渉が困難。以前、各人が自給的な農業を営んでいた頃はそれで理にかなっていたが、現在は活用されていない土地が多い。テコ入れをして、ある程度大きな畑を使えるようにしないと、農業人口は増えない」



阿嘉大橋を背に、左から國吉重信阿嘉区長、当間裕大阿嘉青年会長、西田吉之介さん。

座間味村では、ふるさと納税の返礼品として、同納税サイト「さとふる」に「アップルバナナ」や「島らっきょう」を新たに出品した。これらは、狭い土地でも栽培が可能で、たとえ収穫が難しかったとしても、サイト（プラットフォーム）側が顧客対応をしてくれることから利用しやすいという。「住民の中にはお金を稼ぐことに対しての抵抗感がある方がいるかもしれませんが。しかし、ある程度『稼ぐ力』をつけないと、仕事としては続きません。私の取り組みを見て、自分もやってみよう」と、関心を持ってもらいたい。農業を考える会や、農業通信・農業だよりのような形で住民に対して発信することも検討していきたい」と、西田さんは話す。

## 人材確保が課題

農業をはじめ阿嘉島の地域振興の課題は、人材の確保・育成。産業だけで

なく、芭蕉布でつくる獅子舞の補修や

管理、地元の行事の継続などにも人手不足で苦労している」と語るのは、阿

嘉青年会の当間<sup>とうま</sup>裕大会長である。二〇

歳代から四〇歳までの青年で構成する青年会は、地域の重要な役回りを担っ

てきたが、構成員の減少が著しいとい

う。國吉重信阿嘉区長によれば、カツオ漁業が盛んな頃には五〇人ほどいた

構成員が、現在は一〇名もいない。島の小中学校に勤務する教職員や、島に

拠点を置くダイビングショップの従業員も含めれば、四〇歳以下の人は島に

三〇名以上いるが、本業が忙しく、地域活動への継続的な参加は難しい現状である。

当間さんは、七年前、弟が入院したことをきっかけに島に戻ってきた。当初は給油所に勤めたが、現在は島内の

建設会社で働いている。「空き家はたくさんあるが、那覇に住む持ち主が別荘

のように使っており、移住者が活用す

ることが困難」

國吉区長は、里帰りしたい出身者のための住宅建設を村に要望している。

人手不足に対処するため、ＵＩターンなどを迎え入れようとしても、住宅不

足がネックで受け入れることができないという課題は、座間味島と同様に阿

嘉島・慶留間島でもみられる。



上述の通り、第三次産業が中心の座

間味村においても、第一次産業（特に水産業）の従事者は地道な取り組みを続

けている。むしろ今後は、地域の魚介類・農作物などの生産性を高め、いか

に地元で消費されるかが、座間味の観光はもちろん、村の方々の食の安全安心にとつてプラスになるのではないだ

ろうか。また、生産者の所得を上げるためにも、六次産業化などの取り組みを進める必要がある。

座間味村の第一次産業の従事者は、

観光業などとの兼業が多いゆえに、小規模な事業者が多い。生産物の移出、資

機材の移入コストの低減、ガソリンに加えて軽油やＡ重油などの石油製品の

低廉化など、生産者の負担を軽減する仕組みが求められる。

また、居住可能な土地が限られている座間味村にあつては、後継者を獲得

したくとも、住宅不足からまず彼らが住む家が確保できないという声を、さ

まざまな産業の事業者から耳にした。村では、定住促進住宅および民間賃貸

住宅の合築整備、観光産業などに従事する島外からの若年（四〇歳未満）移住

者向け住宅の整備など、住宅確保に向けた取り組みを実施しているが、まだ

まだ不足している状態である。座間味村は、有人国境離島地域に指定されている。島々が果たす国家的役割も鑑みた、持続可能な地域づくり

に資する積極的な国や県の支援が求められている。

（森田・佐伯）